世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

The Wig Box of Merit（Inv.no.S.8493, Museo Egizio in Turin）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-03 キーワード (Ja): キーワード (En): Ancient Egypt, New Kingdom, Deir el-Medina, furniture, woodworking joint, dynamics 作成者: 西本, 直子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/315

メリトの鬘箱（Inv.no.S.8493、トリノ博物館蔵）について

The Wig Box of Merit（Inv.no.S.8493, Museo Egizio in Turin）

西　本　直　子*
Naoko Nishimoto

Abstract:

Among the famous collection of the Ancient Egyptian woodwork in the Museo Egizio in Turin, a set of chairs, beds, boxes and other items including lamp stand, found at the tomb of the architect Kha and his wife Merit, would be eminently remarkable. The paper examins the wig box of Merit in detail from the viewpoint of woodworking technique. The box seems to be the largest and tallest of its kinds as a wig container throughout the pharaonic period, and particularly assembling work on the connection of four legs to the box is noteworthy.

Keywords: Ancient Egypt, New Kingdom, Deir el-Medina, furniture, woodworking joint, dynamics.

はじめに

筆者は2000年より、古代エジプト第18王朝時代の建築家カー（Kha）とその妻メリト（Merit：Merytとも転記される）の墓（TT 8）から発見された副葬品としての家具一式の実測調査を継続しており、特にこの数年においてはトリノ・エジプト博物館長であるエレーニ・ヴァシリカ博士（Dr. Eleni Vassilika）の助力を受け、作業が著しく進行した。本稿は2001年10月29日と2010年11月22日の２回にわたってなされたメリトの鬘箱（Inv.no.S.8493：図１～７）に関する実測結果の一部をまとめたものである[1]。

古代エジプト文明が約3000年間続いた流れの中では、より豊かな日常生活が追求され、多岐にわたる家具が製作された。現存する例はほとんどが副葬品であり、死後も現世と同じ生活の永続が祈願されたと推定される[2]。

家具の種類としては腰掛け・椅子の座家具、寝台、供物台、枕、アンフォラなどを置くための壷立て、収納箱、櫃などに分類される[3]ものの、いずれも生活の快適さを目的にしている点には変わりがない。これらの家具に関しての、木材への加工の痕跡を見きわめる詳細な観察に基づいた実測図の作成は、古代における意匠上の工夫を考察するに当たって是非とも必要であり、後世へ向けての重要な記録作業とみなされる。ここでは曲面や勾配などが可能な限り、正確に図面化

*環境学部非常勤講師

されるのであるが、木の性状と経年変化による変形を考慮に含めつつ、さまざまな判断をおこなうことが要求され、この過程を経て初めて古代人による意匠の意図の一端を読み解くことができる。

古代エジプト人による自然崇拝はまた家具の意匠にも明瞭に影響を及ぼしている点に注意が惹かれる。崇拝された多神教の神々の中で最強の動物の姿を借り、これを王の権威と一体化させようとした結果、雄牛や獅子の脚を有する家具が作成された。こうした意匠は以降のヨーロッパの家具意匠でも見られるが、その試みの嚆矢として特筆される。ほぼ同時代ではメソポタミアの家具にも獅子脚がうかがわれる一方、形骸化した傾向が看取され、表現のリアリズムに重きを置いた古代エジプトの独自性は注目されて良い[4]。王族の家具に限定されていた獅子脚の用法は、やがて新王国時代に至ると貴族や豪族たちの間にも伝わり、簡潔な獅子脚を持つ椅子や寝台が所有され始める[5]。

第18王朝末期に属するトゥトアンクアメンの家具類を最後として、古代エジプトの家具類は衰退を辿った。

古代エジプトの家具を対象とする場合、以下の３つの視点が必要と考えられる。

・木材の性状を熟知した木工技術の進展と加工に関する意匠

・人間の身体に対する快適性、使用上の利便性、また生活の向上を追究した実利的な改変

・家具に付与された象徴の表現についての考察

古代エジプト文明の消長を、家具の意匠史においても見定めることが現在、研究者たちによって模索されている状況である。

１、建築家カーとその妻メリト

デル・エル＝メディーナ（ディール・アル＝マディーナ）は、新王国時代の王たちの墳墓群である「王家の谷」を造営した職人集合住居址として知られている。トリノ博物館草創期の館長を務めたスキアパレッリ（E. Schiaparelli）[6]は、この集合住居を見下ろす隣接の丘の斜面に造られていた建築家カーとメリトの未盗掘墓を1906年に発掘した。カーは新王国時代第18王朝時代にアメンヘテプ２世、トトメス４世、アメンヘテプ３世という三代の王に仕えた職長であった[7]。アメンヘテプ３世の治世は30年ほど続き、以後のアクエンアテン、トゥトアンクアメンが統治した時代とともに、エジプト学が最も注目する研究領域を形成している。カー夫妻の墓からは、撹乱されないままの状態で椅子・寝台を始めとする家具一揃えが見つかっており、家具史においてこの発見は貴重である。

一方で後の1922年、H. カーターによってトゥトアンクアメン王の墓からも家具が多数発見され[8]、貴族階級であるカー夫妻の家具と同時代の王の家具との本格的な比較検討が初めて可能となった。一例として、カーとメリトの家具では貴金属や貴石を使えなかったために金を黄色、黒檀を黒色、象牙を白色などの彩色に置き換えて装飾を施すなどの工夫をおこなったという比較が指摘されており、興味深い[9]。

トリノのエジプト博物館は、ごく近年の模様替えにより、カー夫婦の家具の展示空間をより広い部屋へと移した。夫と妻の家具を対照させて並べるレイアウトが男女の生活道具の違いを際立

たせている。男性による鬘の使用も知られるが、鬘箱はメリトのものだけが出土し、カーの鬘箱は見つかっていない。メリトが用いたと考えられている鬘は長く、稀有な存在である[10]。メリトの副葬品には化粧箱に収められた道具も多く、高い社会階級の女性の生活の様子が推測される。

2、家具としての箱

座家具や寝台、卓は線材（構造用語で言う細長い材）を組み合わせて作る架構体として同じ分類に属するのに対して、箱は板材と線材、あるいは板材同士を組み合わせて造るので、他の家具とは架構形態が異なる。単純な直方体、いわゆる「箱」型は多数残されており、比較的単純な外形を呈する一方で、加工意匠に多様な試みがなされている点が、カーの箱の実測を通して明らかになりつつある。象徴的な家具意匠には興味深い特徴があり、座家具や寝台などには先に述べた動物の体躯になぞらえた意匠が与えられるのに対して、箱は物を入れて収納する、あるいは金庫のように大切な物を護る「容器」としての機能からか、意匠全体を建築になぞらえる傾向が強い。切妻型、ヴォールト屋根型、神殿型と呼ばれる３タイプが発見されている[11]。

3、鬘

上流階級の人々は暑さで汗をかくのでこまめに水浴し、頭髪は基本的に短くして、宴などの場には鬘を着用した[12]。男性の鬘は耳にかぶさる程度[13]であったと思われる。女性は地毛も大切にしたが、壁画では種々の髪型が見られ、鬘の形への関心は高かったと想像される。前述した通り、メリトの鬘は長いものの中で最も保存状態の良い例[14]で、副葬品として作られた品であるが、手の込んだ意匠は新王国時代後半の流行を伝えている。意匠は華麗であって、中央で分け目をつけた髪を細かく束ねて自然に垂らして、束一本ごとにソバージュ風のカールを施して端末を編み込み、特に顔廻りは毛量を少なくして輪郭を薄く縁取るように趣向を凝らしていた。魅力的だったであろうこの鬘をメリトが身につけた姿は、副葬されたパピルスの冒頭に描写されている。

4、鬘箱の類例

古代エジプト時代における鬘箱の出土例は少ない。例を以下に示す。

1、リシュトから出土した中王国時代の鬘箱。幅680 mm、奥行470 mm、高さ315 mm。幾何学的な端正な直方体を示す[15]。

2、リシュトにおけるセネブティシ（Senebtisi）の墓から出土した鬘箱。中王国時代：幅600 mm、奥行350 mm。破壊された姿で発見されており、長さに関しては不明である[16]。

3、ラフンの墓から出土した中王国時代の鬘箱。幅550 mm、奥行365 mm[17]。

4、王家の谷のイウイアとトゥイウの墓から出土、パピルス製の鬘箱（CG 51119, カイロ博物館蔵）。新王国時代：幅1 m 7 cm、奥行51 cm、高さ50 cm[18]。ただし、ベーカーによれば幅106.68 cm、奥行50.8 cm、高さ49.53 cm[19]。

5、トゥトアンクアメンの墓から出土（JE 61457, Carter Nos. 547+615、カイロ博物館蔵）。新

王国時代：幅40 cm、奥行40 cm、高さ50 cm[20]。

6、新王国時代（Inv.no.2561、大英博物館蔵）のもの。第18王朝：幅445 mm、奥行260 mm、高さ350 mm[21]。

7、新王国時代のもの（ベルリン・エジプト博物館蔵）[22]。

8、ディール・アル＝バフリー出土、パピルス製の鬘箱（JE 26270、カイロ博物館蔵）。第21王朝[23]。

9、ディール・アル＝バフリーの墓DB320出土（JE 29680、カイロ博物館蔵）、ローマ時代[24]。

1のリシュトの例は木製の幾何学的な直方体で特に趣を異にしている。中王国時代の他の2例は小さめであり、男性用であろう。メリトの鬘箱と比較した時、新王国時代のトゥイウの例と大英博物館の貴人の例はパピルスや葦の茎で造られた架構形式がまったく異なっている。唯一トゥトアンクアメンの例が木製で神殿型という共通点があるものの、男性用なので大きさが異なり、鬘の支持形式など相違点が見られる。注目すべき点は、4の王に重用されたイウイアとトゥイウの夫婦の墓から出土した妻トゥイウの鬘箱の大きさが、メリトの箱を水平にしたような数値を示すことである。大きさが具体的に確認できた例は1及び4～6であるが、ひとつとしてメリトの鬘箱と相似した例はない。

5、メリトの鬘箱

突出した大きさを持つメリトの木製鬘箱がこうして注目されるのであるが、その外形は神殿型意匠を採用した箱であり、偏心したヴォールトのような神殿の特殊な屋根形状を模した「蓋部分」（図2）、及びカヴェット・コーニスとトーラスを持つ「箱部分」で構成される。箱内部には上面から110 mmほど下がった位置で2本の棒が水平に並んで側板を貫通して固定されており（図5）、発見当初はこの棒から鬘が吊るされた上に、白布が掛けられていた[25]。

3500年ほど経過してもなお寸分の隙もない接合部は、木工技術の水準の高さを伝えている。各立面の彩色は下書き途中のままであり、縦に長い大型の箱に、どのような装飾が施されようとしたのかも重要である。以下、メリトの鬘箱において注目される諸点を記す。

5-i、神殿型形式

柔らかな曲面が背面に向かって下る独特な屋根の形状は、神殿の典型的な姿であった[26]。屋根の下の、円の1/4を輪郭として繰り抜かれるカヴェット・コーニスとトーラスによる軒飾り（図3～5）が見られる初期の代表的な建築例は、サッカラのジョセル王によるピラミッド複合体（古王国時代第3王朝）であり、エジプト独自の形象として以降も頻繁に用いられた。

神殿型の箱は中王国時代の例[27]の他、新王国時代のトゥトアンクアメンの5例など[28]が見つかっている。絵画資料としてはサッカラやアビュドスの壁画にうかがわれ、古王国時代に遡る[29]。

5-ii、箱部分

箱の上部にはカヴェット・コーニスの桟が廻されて、板材を組んだ箱部分との接合部をトーラ

スで隠している（図４、５）。側面にあるマッシュルーム型の突起の下にはヒエログリフでメリトの名が刻まれ、黄・白・青（現在は変色して暗緑色）・赤で彩色されている。以後、このマッシュルーム状突起とヒエログリフの書かれている面を「正面」と呼ぶこととする（図３、４）。

5-iii、彩色とカヴェット・コーニス

底面外側と箱内部はジェッソが塗られている。カヴェット・コーニスの桟の上面と箱の内部の面は赤く塗られている（図５）。側面４面ともに板素地の上に黒または赤で彩色の下書きが多数見られる（図１）。

正面中央にはメリトと思われる女性の立ち姿が薄く残されているように見えるが、判然としない。花模様のような円がその上に並び、さらにその上部には赤と細い黒の縦線で描いた二列の中にヒエログリフでメリトの名を含んだ短い文が彫られ、黄色と青色（青緑色）の彩色がなされている。ヒエログリフの左右にも植物か波の文様の一部のような下書きが黒線で描かれている。

右側面上部には赤で格子を描いた上に黒線で網目模様が書かれている。背面上部には赤で建物と椅子に座る人物が、また黒で対面する人物の立像が描かれている。中段には赤と黒で格子の下書きが見られ、左半分には編み目模様が、右半分には向かい合う女性の像が二体描かれている。背面にあるこれらすべての下書きは、統一した画面構成を示すようには思われない。

左側面上部には２種類の大きさの異なる植物文様が下書きされたまま、どちらとも決定されずにいる。上段右半分には赤で建物の軒飾りらしき下書きも見える。左側面のカヴェット・コーニス部分は黒の縁取りをした上に白・緑・赤で規則的に塗り分けが施されている。残る３面のカヴェット・コーニス部分も同様に彩色しようとしたらしいが、素地の上に黒線で割り付けしたところで終わっている。メリトが急逝し、作業が中断された様子を伝えている可能性が指摘される。

カヴェット・コーニスの桟の上面の平坦な面には、ぐるりと一本の赤い下書き線が書かれている。線の位置は箱の板外面位置とほぼ一致する。正面の桟上面にはもう一本短い赤線が描かれており、蓋を固定するソケットの位置と符合している。一連の線は加工の際の墨付けと考えて良いであろう。カヴェット・コーニスの桟は四隅で相欠き継ぎされている（図３）。右側面のトーラスが外れているので様子がよく観察される。箱とカヴェット・コーニスの桟の接合線上に半円形をしたトーラス（厚８mm、高さ８mm）を貫通し、桟と箱も貫く木ダボが打たれている（図５）。カヴェット・コーニスの桟と箱の接合部には隙間が見られない。８mmの幅の中に木ダボを打つ繊細な仕事がなされており、経年変化による変形を隠す高度な木工技術が発揮されている。

G. キレンはトゥトアンクアメンのトーラスのある箱２例の断面図を書いている。神殿型の例[30]ではローマ時代の木棺に通底する作り方[31]が見られる。さらに家型の箱[32]では石棺のごとくトーラスは凸型彫刻として描かれているが、カーターのノートを参照すると先述の箱と同じ作り方のようにも見える。メリトの鬘箱に見られる高度な木工技術と比較すると最上級の仕事であるべき王の副葬品としては疑問が残り、改めての精査が望まれる。

鬘や布が掛けられていた二本の桟は正面と背面の板を貫通し、正方形の断面で板の面にあらわれている（図５）。間違えたのか、トーラスの直下には正方形の埋木跡が２箇所見える（図３）。美しい木目を活かそうとした形跡が認められる一方で、製作の途中で試行錯誤があったことが推

察される。

5-iv、構成と素材

箱部分は厚板を雇い実（さね）と木ダボで矧いで箱を作り[33]、約30 mm × 45 mm × 280 mm程度の平角材を箱下部の四隅に繋ぎ、脚としている（図４）。カーとメリトの墓からは木棺を除く16の箱が出土した。しかしこのような脚の作り方がされた例は皆無である。ルーヴル博物館にはカート（Khat）という人名が見られる箱（新王国時代：B.C.1450、N.2661）の類例がある。高さ250 mm程度の小箱で、ほぼ正角材の脚を板材で組み立てた箱に木ダボで接合している。一方でメリトの鬘箱は高さが1050 mmもあり、箱の約1/4の高さの脚を接合して支持するには工夫が必要であっただろう。

素材についてスキアパレッリ[34]は使用樹種をアカシアとしているが、明らかに組織の異なる２種類の木目が見られる。正面と右側面は木目の濃淡が明瞭で間隔が１～３mm程度と細かく、導管のない良質の針葉樹をも思わせるが、身分が高いとは言え、家具に格式の高い輸入材のレバノン杉を用いることは容易でなかったはずである[35]。一方で脚、箱上部のカヴェット・コーニスの桟、トーラス、実（さね）、木ダボは明らかに堅木、つまり広葉樹と思われる。特にカヴェット・コーニス部分は赤く彩色されているが、トーラスとともに素地にも赤味があることがうかがわれ、これはアカシアを思わせる。

正面と右側面はほぼ中央で雇い実と木ダボを使い、２枚の板を矧いで作られた（図３，４）。２枚の木目は連続していない。単に板幅を補うためとも考えられるが、鏡板をわざわざ２枚に分けて矧ぐ方法は板の反りによる割れを避ける意図があり、現代でもよく使われる。直径40 mm内外の生き節が複数見られるが、今日まで木の色味は非常に良好に伝えられている点が注目される。全面が丹念にヤスリで平滑にされており、傷を埋めたペースト痕も何箇所かで見られる。背面と左側面は先述の明瞭な木目をもつ小幅板と約400 mm幅の広葉樹を雇い実で矧いでいる。

底面はひび割れの様子からも一枚板と思われるが、表面にジェッソが塗られて木目が見えず（図６）、樹種の判断は難しい。底面の周囲には正面・側面・背面の木口が見える（図７）。側面板の木口厚みを実測すると24 mmであった。正面・背面でも側面板の木口が見えているが（図３）、厚みの実測値は20 mmである。接合部に隙間が生じていない点からも、この４mmの差は側面板と正面板、あるいは側面板と背面板の接合が相欠き継ぎ（図４）であるためと推測される。

右側面をなす２枚の板材は、外側へ凸に反っている。板の樹芯に近い方を外側に向けたと考えられる[36]。底部（図７）で木口を実測すると正面と背面の板の厚みは20 mmであった。正面ないし背面の板が底面の木口に被さっており（図４）、厚み20 mmの正面板・背面板から底面板木口に向かって木ダボを打って留めているが、この底面は厚みが薄い。厚み24 mmの右側面と左側面の板と底面はそれぞれ２箇所で蟻継ぎ（図４）されている[37]ために、側面の蟻継ぎ仕口部分で15 mm厚の底板の木口が確認される（図１）。底面の薄さが気になるものの、今の工法にも似た類例がある。厚い側板に「しゃくり」を入れて正面・背面の板をダボで側板に固定し、底面の木口にも直接ダボで留め付ける方法で、最も厚い側板が主要な荷重を支え、底板は吊られている状態となる[38]。薄い底板でも垂れにくい工法とされる。底板への荷重の集中を避けて側板にうまく荷重を伝えていることが肝要である。

底面と側板が蟻継ぎ（dovetail）される例はカーの箱でも見られる。しかし両端に２箇所ずつ蟻継ぎがある（図４）例はない。メリトの鬘箱は右側面では２枚の板を中央で矧いでいる。もし蟻継ぎが一箇所であれば板の継ぎ目と重なって木ダボが効かないであろう。凸型の反りを引っ張る効果から考えても、２枚の板の各々について蟻継ぎがなされることは効果を発揮していると考えられる。左側面ではやはり２枚の板を矧いでいるが、継目は中心を外れて正面左の脚Ｄから６cm程度の場所にある（図１）。蟻継ぎが板の接合位置と重ならず、他の例のように中央に一箇所ということも可能であろうが、やはり蟻継ぎを２箇所設けている（図４）。薄い板に荷重が集中することを避け、分散させていると思われる。平角材の脚に箱自体と内容物の重さ（垂直荷重）をいかに伝え、支えるかについても木工の知恵を要したであろう。

5-v、腰掛け継ぎと殺ぎ継ぎ

背面において脚は平角材の短辺方向が見えるので、細長い長方形をしている。脚と箱の接合線を見ると箱底面と脚が出会う点とその僅かに上の２箇所で「腰掛け」が作られていることが見て取れる（図９）。興味深いのは、背面では明らかに「腰掛け継ぎ」の肩（欠き込み）が作られている（図10）[39]のに対し、正面では「腰掛け継ぎ」をできるだけ滑らかな線に見せようと腐心した形跡がうかがわれることである。向かって右（図９）は腰掛け継ぎの「肩」を作っているのだが、これを目立たぬように修正しようとした形跡があり、向かって左（図８）は接合線を滑らかにし、「腰掛け継ぎ」の「肩」が消えてついに曲線を使った独特な仕口となっている。

図４の左下、箱の右側面脚Aには、直角に接合する正面板との雇い実継ぎの実（さね）の木口が見える。その上部で脚の先端がすっぱりと斜めに切られている。腰掛けを造らずに斜めの接合線をとる方法が選ばれているのであるが、詳しく見るならば脚Ａのａからｂにかけて、やや先すぼまりに接合線に1/70ほどの勾配が付けられていることが明瞭である。４本脚の側面側は、すべて先すぼまりに傾きがつけられており、脚と箱の傾斜した接合面により接触面積を増やして箱側面から伝達される垂直荷重を分散させていると思われる[40]。鬘箱の発見当初、鬘と布は二本の桟で宙づりにされ、垂直荷重は側面の板にまず伝達されていた点を指摘しておく。

5-vi、蓋と鍵

蓋は広葉樹である。箱正面中央上部のマッシュルーム型の突起と、蓋中央頂部にある同様の突起を八の字に紐で結わえ、封印をおこなった。蓋のマッシュルーム型突起から中心線に沿って「オシリスへの捧げ物…」というヒエログリフによる定型文が、勾配を下る方向に向かって描かれている。その左右には赤で格子の下書きが見られる（図２）。蓋裏面には勾配が下がった部分に幅一杯に取付けられた桟と箱上部のカヴェット・コーニスの桟に図４の断面図のように蓋を背面で固定する仕組みを備える。蓋下正面中央部には、舌状の突起をカヴェット・コーニスの桟上面の細長い溝に納めて蓋を固定する仕組みが考慮された。蓋の裏面には欠損を隠す埋木がなされ、ソケット廻りや蓋の縁前面には赤い下書き線がはっきりと残されている。

5-vii、計画寸法

メリトの鬘箱の箱部分の大きさは幅444 mm、奥行き440 mm、高さ1050 mmであった。トゥト

アンクアメンの鬘箱（Carter Nos.547+615、カイロ博物館蔵）は、カーターの実測によれば幅400 mm、奥行き400 mm、高さ500 mmで、メリトの鬘箱の高さがトゥトアンクアメンの鬘箱の約2倍であることが判明する。メリトの鬘の長さは540 mm[41]であり、これを収納するために充分、箱の背を高くしなければならなかった。一方でトゥイウの鬘箱との寸法の共通点は、女性の鬘箱としての規格寸法があるのかもしれないと感じさせる。当時用いられた尺度、1 cubit は 525 mmであり、蓋を含めない箱部分の全高は、525 mm×2＝1050 mm＝2 cubitとなる。木の繊維方向は経年変化によってそれほど収縮しないはずであり、計画高さに近い値が今なお保たれているように思われる。

結語

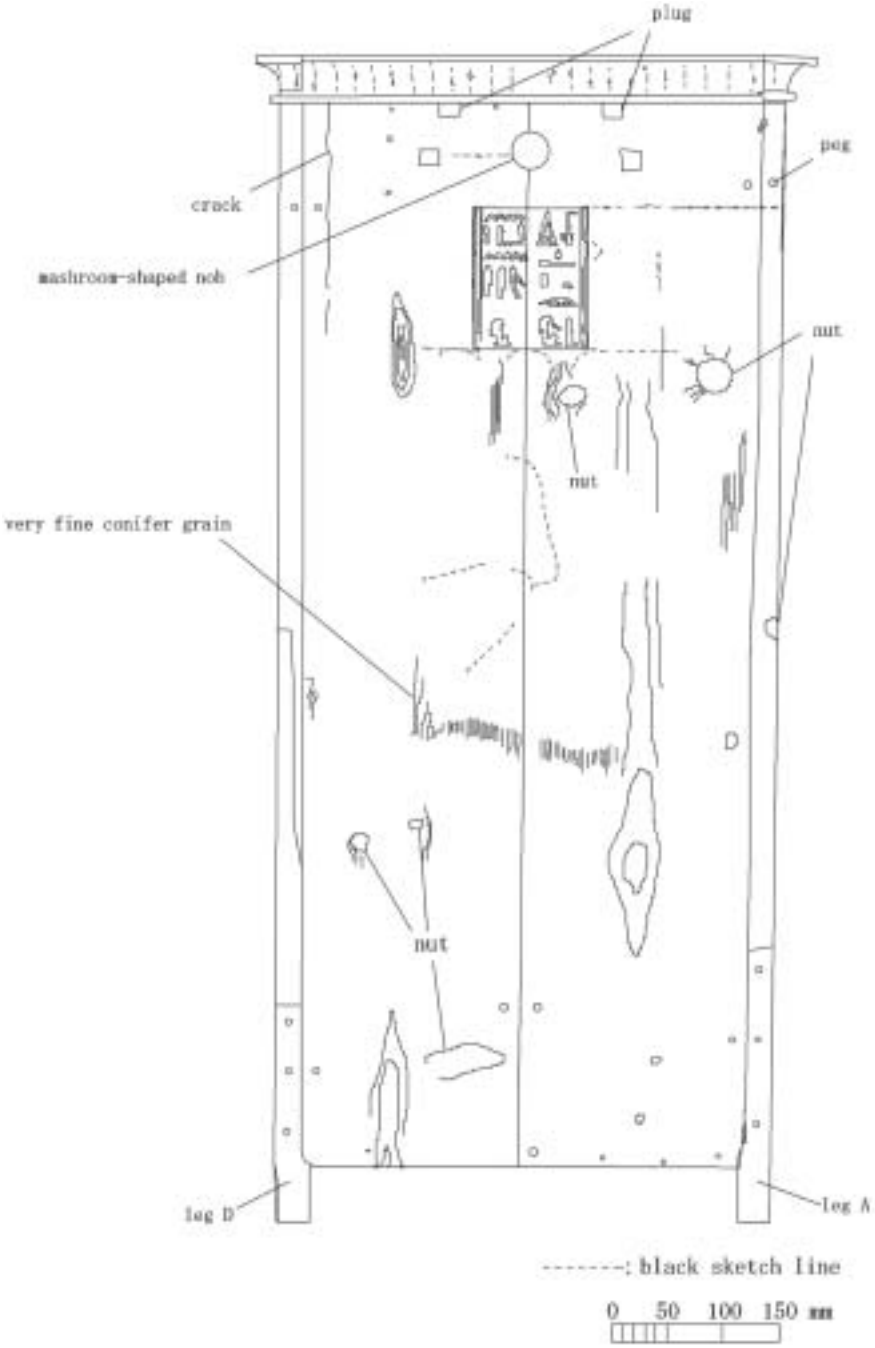
彩色が中途で終わっているものの、メリトの木製鬘箱は非常に優れた加工技術者のもとで製作されたらしいことが実測調査によって明らかにされた。スキアパレッリによる記述[42]の後、この箱は数冊の書によって言及されているが、詳細な報告は未だ、ほとんどなされていない点が惜しまれる。鬘箱の出土そのものが珍しく、今後のさらなる研究の展開が期待される[43]。

ベーカーは縦に長い「小さな神殿型の鬘箱」と書いており、これはトゥトアンクアメンの橇付きの神殿型カノプス収納箱[44]も家具として扱っているための表現と見られる。縦長の箱家具もまた珍しく[45]、類例は希少である[46]。家具の分類そのものの再考も望まれよう。

メリトの鬘箱はおそらく縦長の箱家具として最大の例のひとつと考えられ、他の箱とは異なる尺度の扱いがなされている可能性も指摘される。鬘箱の各立面に残存する下書きの格子線や蓋の分析とともに、引き続き考察を進めていきたい。

図１：メリトの鬘箱、各立面の写真。左から右に、左側面、正面、右側面、背面。

図２：メリトの鬘箱、蓋を正側面より見る。



Front view of the wig box of Merit,
Inv.no.S.8493, Museo Egizio in Turin
Drawn by naoko nishimoto.

図３：メリトの鬘箱、正面図。

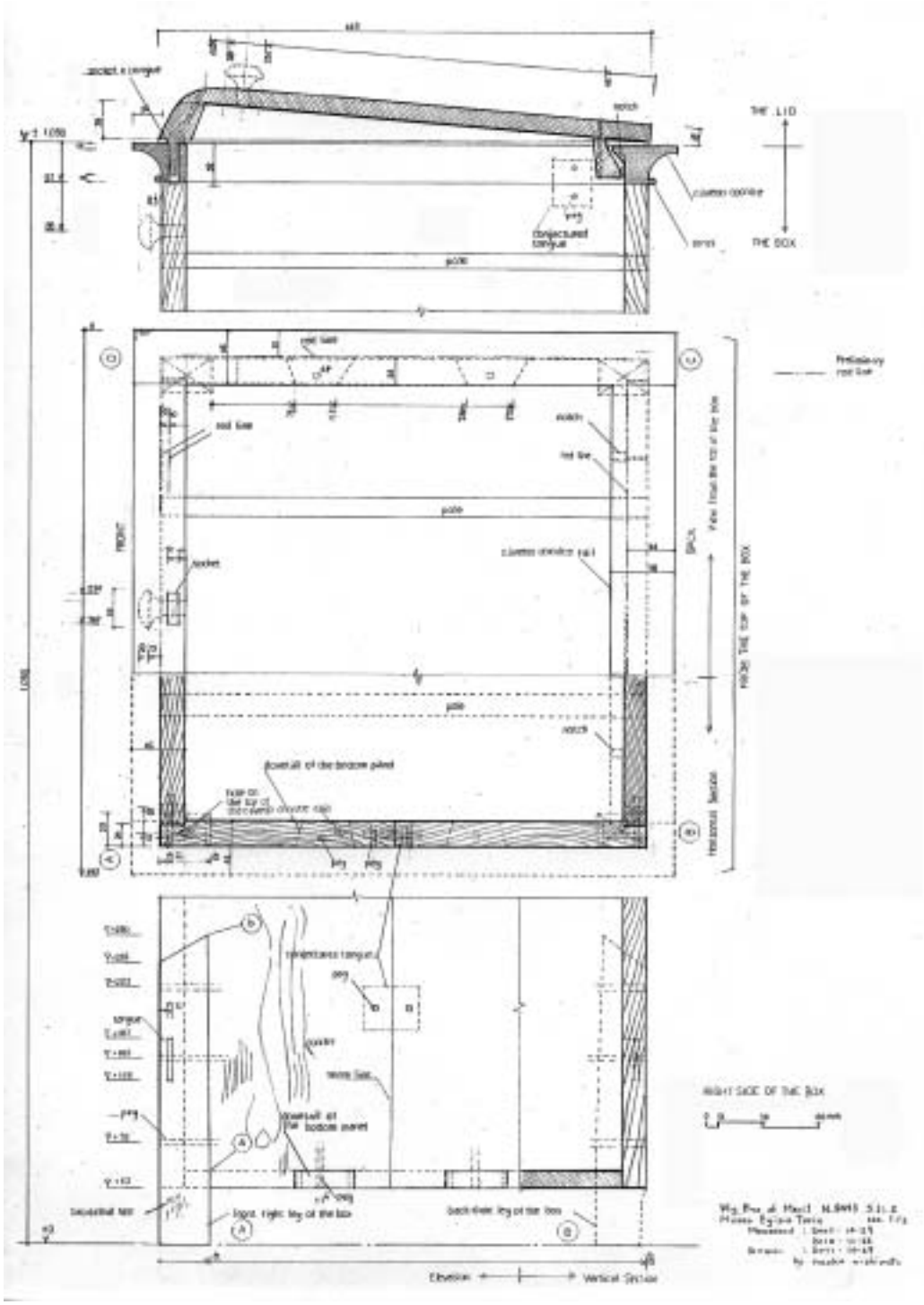


図４：メリトの髪箱、詳細図。

図５：メリトの髪箱、蓋を外した状態。

図６：メリトの髪箱、上からの見下ろし。

図７：メリトの髪箱、底部の見上げ。

図８：メリトの髪箱、正面：向かって左脚D。

図９：メリトの髪箱、正面：向かって右脚A。

図10：メリトの髪箱、背面：向かって右脚C。

参考文献リスト

Baker 1966: H. S. Baker, *Furniture in the Ancient World: Origins and Evolution 3100-475 B.C.* (The Connoisseur, London, 1966).

Beekman 1949: W. B. Beekman, *Hout in alle tijden*, Deel I: *Bossen, bomen en toegepast hout in het verleden*. Prae-historie en Historie tot en met de Iraniërs (A. E. Kruwer, Deventer, 1949).

Beinlich and Saleh 1989: H. Beinlich and M. Saleh, *Corpus der hieroglyphischen Inschriften aus dem Grab des Tutanchamun* (Griffith Institute, Oxford, 1989).

Bjerregaard 2004: L. Bjerregaard, "Eine altägyptische Perücke aus der Zeit um 1500 v.Chhr: Probleme der Fixierung und Konservierung von Haaren", *Restauro: Zeitschrift fur Kunsttechniken, Restaurierung und Museumsfragen* 110:1 (2004), pp. 49-51.

Brunton 1920: G. Brunton, *Lahun* I: *The Treasure*. British School of Archaeology in Egypt 27. Egyptian Research Account Twentieth Year, 1914 (Bernard Quaritch, London, 1920).

Carter 1933: H. Carter, *The Tomb of Tut.ankh.Amen*, Vol. III (Cassel, London, 1933).

Cerný 1965: J. Cerný, *Hieratic Inscriptions from the Tomb of Tutankhamun* (Griffith Institute, Oxford, 1965).

Cox 1977: J. S. Cox, "The Constructions of an Ancient Egyptian Wig (c. 1400 B.C.) in the British Museum", *Journal of Egyptian Archaeology* 63 (1977), pp.67-70.

Davis 1907: T. M. Davis, *The Tomb of Iouiya and Touiyou*. Excavations: Bibân el Molûk 2 (Archibald Constable & Co., London, 1907).

Eaton-Krauss and Graefe 1985: M. Eaton-Krauss and E. Graefe, *The Small Golden Shrine from the Tomb of Tutankhamun* (Griffith Institute, Oxford, 1985).

Fletcher 2000: J. Fletcher, "Hair", in P. T. Nicholson and I. Shaw (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology* (Cambridge University Press, Cambridge, 2000), pp.495-501.

Fletcher 2002: J. Fletcher, "Ancient Egyptian hair and wigs", *The Ostracon: the Journal of the Egypt Study Society* 13:2 (Summer 2002), pp.2-8.

Gautier and Jéquier 1902: J. E. Gautier and G. Jéquier, *Mémoire sur les fouilles de Licht*. MIFAO 6 (Institut Francais d'Archéologie Orientale, Le Caire, 1902).

Gerner 1992: M. Gerner, *Handwerkliche Holzverbindungen der Zimmer* (Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1992).

Graubner 1986: W. Graubner, *Holzverbindungen: Gegenüberstellungen japanischer und europäischer Lösungen* (Deutsche Verlags-Anstalt, Stuttgart, 1986).

Janssen 2009: J. J. Janssen, *Furniture at Deir el-Medina, including Wooden Containers of the New Kingdom and Ostracon Varille 19* (Golden House Publications, London, 2009).

Killen 1994: G. Killen, *Ancient Egyptian Furniture*, Vol. II: *Boxes, Chests and Footstools* (Aris & Phillips, Warminster, 1994).

Killen 2000: G. Killen, "Wood: Technology", in P. T. Nicholson and I. Shaw (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology* (Cambridge University Press, Cambridge, 2000), pp.353-371.

Leospo 1988: E. Leospo, "Woodworking: Furniture and Cabinetry", in A. M. Donadoni Roveri (ed.), *Egyptian Civilization: Daily Life* (Electa, Milano, 1988), pp.120-159.

Mace and Winlock 1916: A. C. Mace and H. E. Winlock, *The Tomb of Senebtisi at Lisht*. The Metropolitan Museum of Art Egyptian Expedition Publications, Vol. 1 (Metropolitan Museum of Art, New York, 1916).

Manuelian 1982: P. D. Manuelian, "Furniture", in E. Brovarski, S. K. Doll, and R. E. Freed (eds.),

Egypt's Golden Age: The Art of Living in the New Kingdom 1558-1085 B.C. (Museum of Fine Arts, Boston, 1982), pp.63-66.

Moiso 2008: B. Moiso (ed.), *Ernesto Schiaparelli e la tomba di Kha* (Adarte, Torino, 2008).

Müller 1982: C. Müller, "Perücke", in W. Helck und W. Westendorf (eds.), *Lexikon der Ägyptologie*, Band IV (Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1982), cols.988-990.

Nakashima 1981: G. Nakashima, *The Soul of a Tree: A Woodworker's Reflections* (Kodansha International, Tokyo, 1981).

Nicholson and Shaw 2000: P. T. Nicholson and I. Shaw (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology* (Cambridge University Press, Cambridge, 2000).

Quibell 1908: J. E. Quibell, *Tomb of Yuaa and Thuiu*. Catalogue Général des Antiquités Égyptiennes du Musée du Caire, nos. 51001-51191 (Service des Antiquités de l'Égypte, Le Caire, 1908).

Reeves 1990: N. Reeves, *The Complete Tutankhamun: The King, the Tomb, the Royal Treasure* (Thames and Hudson, London, 1990).

Schiaparelli 1927: E. Schiaparelli, *La tomba intatta dell'architetto Kha nella necropoli di Tebe*. Relazione sui lavori della missione archeologica italiana in Egitto (anni 1903-1920), vol. 2 (Museo di Antichità, Torino, 1927).

Sliwa 1975: J. Sliwa, *Studies in Ancient Egyptian Handicraft: Woodworking*. Universitas lagellonica acta scientiarum litterarumque 404 (Nakladem Uniwersytetu Jagiellonskiego, Krakow, 1975).

Strouhal 1992: E. Strouhal, *Life of the Ancient Egyptians* (University of Oklahoma Press, Norman, 1992).

Tassie 2002: G. J. Tassie, "Ancient Egyptian Wigs in the Cairo and Other Museums", in M. Eldamaty and M. Trad (eds.), *Egyptian Museum Collections around the World: Studies for the Centennial of the Egyptian Museum, Cairo*, 2 Vols. (Supreme Council of Antiquities, Cairo, 2002). Vol. II, pp.1141-1153.

Ulrich 2007: R. B. Ulrich, *Roman Woodworking* (Yale University Press, New Haven and London, 2007).

Vassilika 2009: E. Vassilika, *Masterpieces of the Museo Egizio in Turin: Official Guide* (Fondazione Museo delle Antichità Egizie, Torino / Scala Group, Firenze, 2009).

Vassilika 2010: E. Vassilika, *The Tomb of Kha: The Architect* (Fondazione Museo delle Antichità Egizie, Torino / Scala Group, Firenze, 2010).

小口・西本 2004: 小口和美・西本直子「XI-7 家具・木工品の製作技術」、日本オリエント学会編『古代オリエント事典』、岩波書店、2004年、pp.213-215。

大工道具研究会編 2011: 大工道具研究会編「木組み・継手と組手の技法」、誠文堂新光社、2011年。

鳥海 2010: 鳥海義之助「図解木工の継手と仕口」、理工学社、2010年。

西本 2000: 西本直子「トゥトアンクアメン王の折り畳み式寝台」、地中海学研究23 (2000)、pp.17-44。

注

1　古代エジプトの家具はほとんどが木製品であるが、他の古代文明では見ることがきわめて困難な木製の完形品が良好な残存状態で墳墓内から多数見つかっている。世界の家具史では最古の例として記述される古代エジプト家具研究は、同時に古代の木工技術研究の解明と重なっており、この点を踏まえた考察が必要である。Baker 1966; Sliwa 1975; Killen 1994; Leospo 1988; Killen 2000; 西本 2000; 小口・西本 2004 を参照。人体への繊細な配慮を求めて施された古代における意匠上の工夫は、家具作家にとって時代を超えた参照作品であり続けるように思われる。

2　裕福な者は、誰でも20歳から25歳になると墓を準備し始めたと考えられている。Cf. Strouhal 1992, p.256.
3　Manuelian 1982, p.63. 稀少ながらランプ台も発見されている。
4　Baker 1966, p.186, fig.298.
5　Leospo 1988, p.144.
6　Cf. Moiso 2008.
7　建築家カーについてはSchiaparelli 1927; Vassilika 2009, pp.48-56; Vassilika 2010を参照。
8　Carter 1933; Reeves 1990.
9　Leospo 1988, p.144. カーの椅子に関する記述。
10　Fletcher 2002, p.4; See also Fletcher 2000.
11　Baker 1966; Killen 1980. 文字資料と出土した箱との関連を探る研究としてはJanssen 2009を参照。
12　医師であり、またエジプト学者でもあるストロウハルは、虱対策としての衛生観念からも頭髪を短くして鬘を使っていた可能性や、外出時に直射日光から頭を護る目的についても触れている。Strouhal 1992, pp.83-87. 古代エジプトの鬘一般についてはMüller 1982を参照。
13　Fletcher 2000, p.496. 平均的な長さは38 cmである。
14　Fletcher 2000, p.497, fig.20.2; Vassilika 2010, p.52.
15　Gautier and Jéquier 1902, p. 50.
16　Mace and Winlock 1916, p.105.
17　Brunton 1920, p.41; Tassie 2002, p.1143.
18　Davis 1907, Pl. XLII; Quibell 1908, pp.57-58; Baker 1966, p.72, fig.79; Tassie 2002, p.1145; Killen 1994, p.30.
19　Baker 1966, p.336.
20　Reeves 1990, p.192; Killen 1994, pp.77-78, pl.63. なお蓋には「ウシャブティ」という書きつけがなされていた。Carter 1933, pp.119-120; Cerný 1965, pp. 14-15; Beinlich and Saleh 1989, p.220.
21　Cox 1977, p. 67; Killen 1994, p.30, pl.16.
22　Tassie 2002, p.1148; Bjerregaard 2004.
23　Tassie 2002, p.1146.
24　Tassie 2002, *ibid*.
25　Schiaparelli 1927, p.101; Baker 1966, p.72; Vassilika 2009, p.53; Vassilika 2010, pp.51-53.
26　Beekman 1949, p.473, fig.7.33; Eaton-Krauss and Graefe 1985, p.2.
27　Killen 1994, pp.23-26; Baker 1966, p.149, fig.229. シトハトホルイウネト（Sithathoryunet）の箱（MMA 16.1.1：メトロポリタン博物館蔵）、中王国時代。
28　Reeves 1990, p.192; Baker 1966, pp.97-98; Killen 1994, pp.69-75. トゥトアンクアメンの箱、JE 61477, 61476, 61480, 61478, 61479; カイロ博物館蔵。Killen 1994, pl.28, Inv.N.2915; ルーヴル博物館蔵、貴人の箱。Davis 1907, pl.XLI; Baker 1966, p.72, fig.80; Killen 1994, p.46, JE 69074, 69075; カイロ博物館蔵、イウイアとトゥイウの箱。
29　Killen 1994, p.22. サッカラの例は第 6 王朝のものである。
30　Killen 1994, p.73, fig.76. JE 61480, Carter No.43.
31　Ulrich 2007, p.60, fig.4-1.
32　Killen 1994, p.52, fig.60. JE 61445.
33　Gerner 1992, p.15. 17世紀ドイツの木工の書において共通する工法が記されている。See also Graubner 1986, p.152.
34　Schiaparelli 1927, p.101.
35　木目による樹種の特定は慎重を要するが、少なくとも異種材を組み合わせていることが看取される。
36　いわゆる「木裏」を外に向けたと思われる。
37　大工道具研究会編 2011、p.28。
38　鳥海 2010、p.96。Nakashima 1981, p.215.
39　肩を造るためにわざわざ別材を挿入しているようである。

40　のげ継ぎではないが、斜めの仕口の原理は通底する。大工道具研究会2011、p.14。

41　Vassilika 2010, p.52.

42　Schiaparelli 1927, pp.101-104. 家具の項とは別に書かれている。Baker 1966, pp.119 and 123, fig.169; Leospo 1988, pp.150-151. 古王国時代の復古様式との指摘もなされている。Cf. Vassilika 2010, p.52. なお、スキアパレッリがこの箱の板材に描かれているとした図は、カーの他の家型の箱の蓋の背面に見られる落書きと混同されているように思われる。

43　キレンはメリトとトゥイウの髪箱を項目に入れず、大英博物館のN.2651の素材を取り上げ、類例でトゥイウの髪箱とトゥトアンクアメンのパピルス収納箱に触れている。用途を考慮せずに技術のみを見る方法を採用しており、再検討を要する。

44　Baker 1966, p.101, fig.130; Eaton-Krauss and Graefe 1985, pl.I; Reeves 1990, pp.119-121 and 140.

45　Baker 1966, p.148. Louvre Inv.no.N2945. 高さ558.8 mmの新王国時代後期の例である。

46　古王国時代のリヴァイヴァルという指摘もあるが、絵画資料以外まだ見出されない。Leospo 1988, p.150.